

『今月の天候と農作業』

通巻第5594号
8月号
平成28年8月4日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。

【予報のポイント】

暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間の前半はかなり高くなる可能性があります。・湿った気流の影響で、向こう1か月の降水量は平年並か多いでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、高い確率50%です。

3～4週目は、高い確率50%です。

<1週目の予報> 8月6日(土)～8月12日(金)

期間のはじめは湿った気流の影響で雲が広がりやすく、雨の降る所がありますが、その後は高気圧に覆われて概ね晴れるでしょう。

※明日から1週間の、費別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 8月13日(土)～8月19日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 8月20日(土)～9月2日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆普通期水稻

1 水管理と追肥

根の健全化のため、間断かん水を行いますが、出穂前後は十分、水を保ちます。台風時は深水とし、通過後も吹返しの高温・乾燥風による障害を防止するため風が止むまで水を保ちましょう。

ヒノヒカリの追肥は幼穂の長さが1センチ程度になったら行います。一発型の肥料を用いたほ場では施用する必要はありません。

2 病虫害防除

今年の葉いもちの発生量は平年より多い状況ですが、夏期の高温期間は発病が一時停滞し目立たなくなります。穂いもちの発生を抑えるため出穂前と穂揃期頃に防除しましょう。

トビイロウンカ（秋ウンカ）の被害は減収が著しいので、予察情報や観察をもとに防除します。カメムシ防除は穂揃期とその10日後の2回行います。出穂の2週間以上前までに地域ぐるみでの周辺除草がカメムシ密度低下に有効です。ただし、出穂直前に行うと逆にカメムシを水田に追い込んでしまうので注意しましょう。

◆大豆

1 中耕・培土等

雑草対策や発根促進のため、中耕・培土を2回行います。1回目は本葉三葉期に第一節の位置まで、2回目は本葉五葉期に第三節の位置までが基本ですが、梅雨の影響などで播種が遅れたほ場では、草丈や開花（莢）位置が低くなるので、培土の高さは収穫時の刈刃位置も考慮しましょう。ほ場の排水溝も整備します。

2 病虫害防除

ハスモンヨトウ防除は若齢幼虫時が効果的です。ほ場観察に努め、孵化直後の幼虫食害による白い斑葉（網目状の被害）を見つけたら直ちに防除しましょう。

◆そば

播種時期は、山間地域が8月上中旬、西北諸県地域は8月下旬、沿海地域は8月下旬～9月上旬です。

10aあたり播種量は、条播の場合は6キロ、散播は約10キロです。排水溝を設置し、天候を見ながら播種します。

(荒砂 英人)

施設野菜

育苗開始時期にあたり、8月の高温は雌花の着生や発達に大きな影響を与えます。温度管理に注意し、こまめなかん水管理が必要です。

育苗ハウスでは防虫ネットの設置が欠かせませんが、ハウス内の温度が高くなるため、遮光資材等を利用して昼間の温度上昇を抑えましょう。ただし、曇雨天日や朝夕には苗に光が当たるように遮光資材の開度を調整します。

◆きゅうり

高温期の育苗では地上部の生育に対して鉢内の根量が少なくなります。このような苗を定植すると活着不良等により初期生育が遅れます。健苗育成のためにはハウス内の温度を下げ、こまめなかん水を行います。

アブラムシ類やアザミウマ類が媒介するウイルスによって発生するモザイク病（CMV等）や黄化えそ病（MYSV）の発生に注意が必要です。防虫ネットにより媒介昆虫の侵入を防ぎ、定期的な薬剤防除やウイルス病の伝染源となるハウス周辺の雑草の除去を徹底しましょう。

◆ピーマン

セル苗など若苗で定植する場合には、初期生育が旺盛になるため、基肥の減肥や活着後のかん水を控えて、草勢を調整します。

鉢上げを行い二次育苗する場合には、生育が進むと蒸散も盛んになるので、日中の乾燥を防ぐために適宜かん水を行いますが、夕方のかん水や多かん水は避けます。徒長を防ぐため鉢ずらしを行い、がっちりした苗に仕上げましょう。

◆トマト

ミニトマトでは下旬よりセル苗のダイレクト定植が始まります。初期生育が旺盛となり異常茎（めがね）が発生しやすくなるので、基肥を減らし、活着後のかん水を控え、草勢を調整します。黄化葉巻病（TYLCV）対策としてウイルスを媒介するコナジラミ類の防除を徹底します。

◆いちご

蒸散量の増加により、鉢内の培土が乾燥しやすくなるため、午前中に十分なかん水を行いましょう。水のかかりにくいところは手かん水を行うなどこまめな管理が必要です。緩効性肥料等を置肥する場合は、今月中旬までに施用します。極端な肥料切れは苗質に大きく影響しますので、苗の生育状況に応じて、液肥の葉面散布等を実施します。

（黒木 正晶）

葉茎菜類及びいも類

◆さといも疫病への対策

近年、さといもの疫病が各地区で多発し深刻な被害が発生しています。梅雨は明けたものの、地上部が繁茂し疫病が蔓延しやすい状態となっています。梅雨時期の降雨で埋もれてしまった排水路の再整備や適期・適量な追肥による健全な作物作り、定期的な薬剤散布を続けましょう。

◆秋冬野菜の土づくり

秋冬野菜の植付けにむけて土づくりを行う時期です。作土層の拡大や排水性の向上のため深耕する『物理性の改善』、土壌分析に基づき石灰資材等で土壌酸度を調整する『化学性の改善』、完熟した堆肥等の有機質資材を投入する『生物性の改善』といった3つの視点で土づくりを行う事が重要です。

◆加工にんじん

高台地帯では8月上旬、沿海地帯では中旬～下旬が播種の適期となりますが、土壌が乾燥でも過湿の状態でも発芽率が低下します。ニンジンは一斉に発芽させることが多収につながるため、かん水施設のあるほ場では播種前に

適度なかん水を行ってから耕耘・播種します。また、干ばつ等で土壌が乾燥しやすい場合は播種後もかん水を行います。

◆食用かんしょ

4月に植付けたかんしょの収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなりますので適期に収穫しましょう。また、秋にかけて鱗翅目幼虫（ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等）が多発する時期になりますので、若齢幼虫期に薬剤防除を行います。

◆さといも

マルチ栽培の石川早生は収穫が遅れると「水晶芋」や「割れ芋」等が発生し品質が低下しますので、8月中旬までには収穫を終えましょう。

中生種では8月の土壌水分量が収量・品質に大きく影響します。代表的な生理障害として、土壌の乾燥による石灰の吸収阻害で発生する「芽つぶれ症」があります。かん水が可能なほ場では、スプリンクラーの利用や通路かん水などを行ってください。また、今月から来月にかけてはヨトウムシ類が発生しますので若齢幼虫期に防除を徹底しましょう。

◆キャベツ・はくさい

年末～年明けに出荷する作型の播種時期となります。育苗ハウスはサイドに防虫ネットを張り、120～150穴セルトレイで育苗します。25日後で定植期に達しますので、本ぽの準備が遅れないようにしましょう。

(杉村 幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆かんきつ全般

今年は過去10年で最も黒点病の発生が多く、病虫害発生予察注意報が発令されています。基準どおりの防除を徹底しましょう。

◆温州みかん

今年の極早生温州は、結果数が多い傾向が見られます。Mサイズの果実横径は8月10日の時点で50～56ミリが理想です。肥大が遅れている樹については、さらに摘果を行いましょう。

◆完熟きんかん

8月下旬からは、傷果を中心とした荒摘果を開始しましょう。初期肥大を確保するため、結果確認後の施肥とかん水を十分に行いましょう。

夜温が早く低下する中山間地域では、9月から加温が必要な園地が出てきます。早めに準備を進めておきましょう。

◆マンゴー

7月下旬以降の剪定園では、第二新梢の充実不足から、翌年の花芽形成が悪くなるのがわかっています。剪定直後から夜間24℃設定で加温し、昼間も換気開始温度を32℃に設定することで、早朝から施設内の温度を確保し、新梢の発生と充実促進を図りましょう。

2 落葉果樹

◆ぶどう

収穫終了後の早期落葉は、貯蔵養分の減少とともに、翌年の作柄にも影響を及ぼします。べと病等の防除を徹底し、早期落葉を防止しましょう。

◆くり

今月から収穫が始まります。毎日収穫し、特に温度の低い朝の時間帯に収穫することで、病虫害果や腐敗果を減らすことができ、その後の品質も良好になります。

3 台風対策

風対策としての防風ネットの点検、冠水対策としての排水溝の整備を行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策などで行う薬剤散布は台風襲来前に実施しましょう。

(山口 和典)

花 き

◆夏秋ギク

強い日射により生長点付近の葉焼けが懸念されますので、遮光や換気、葉面散布剤の散布、かん水等の対策が必要です。9月出荷では高温や多肥によって貫生花や扁平花などの奇形が多く発生しますので、施設内の気温をできるだけ下げのために遮光や換気等を行いましょう。

◆秋ギク

各作型の作業計画に応じて、育苗・冷蔵・定植などの作業を進めます。採穂は、光合成産物を十分に蓄えた晴天日の午後に極力、行います。冷蔵は穂・苗の貯蔵と生長促進のために2～4℃で実施しますが、冷蔵期間が長期になると穂の傷みが多くなります。さらに、「神馬」系統の品種は幼若性の獲得による開花遅延も懸念されますので、冷蔵は3週間までにしまししょう。

◆ホオズキ

最も暑い時期の出荷となるため、収穫後は速やかに水につけるとともに、結束時に水切りを実施し、品質保持剤を使用し、十分な水揚げを行いましょう。また、出荷終了後は、土壌伝染性のウイルス対策として残渣の腐熟処理を徹底しまししょう。

◆スイートピー

品種と植付け予定日にあわせて催芽処理・種子冷蔵を行います。種子はできるだけ充実した大きいサイズのものを選びます。吸水中に酸素不足を防止するため吸水処理は流水中で行って下さい。また、吸水時の水温が低いと発芽率が低下しますので、吸水時の水温は30℃程度に保ちまししょう。

◆シキミ

気温が高くダニ類の被害が多い季節になります。定期的な防除で良品生産に努めて下さい。最も需要のある時期ですが、高温期でバクテリアが繁殖しやすいので清潔な水で水揚げを行い、出荷先で事故品が出ないよう気をつけまししょう。

◆デルフィニウム

平坦地では8月中旬に鉢上げを行います。育苗中は、定植時に本葉10枚前後に達するのを目標にかん水、施肥を行って下さい。中山間地では定植が始まります。早期抽だいを抑えるためにハウス内は換気や遮光を行い、できるだけ気温の上昇を防ぎましょう。

◆トルコギキョウ

平坦地では種子冷蔵終了後の夜冷育苗が始まります。12時間日長・夜温12℃程度で育苗します。発芽後は定期的に追肥を行い、苗の充実を図ります。育苗中の高温や乾燥で低温の効果が失われますので、日中は十分な換気を行うとともに、適切なかん水管理に努めましょう。

◆キイチゴ

秋に向けて弱枝や不良枝の切り戻しを行います。一度に実施するとストレスにより枯死する場合がありますので、樹勢維持のための充実したシュートを最低5本程度残し、切り戻しは数回に分けて上旬までに実施します。ひどく乾燥すると枯死する場合がありますので、適宜かん水を行います。

(中村 広)

畜 産

高温多湿な宮崎の気候は家畜の飼養管理において様々な影響を及ぼします。暑熱対策の実施で、家畜がより快適に過ごせるようにしましょう。

夏場は家畜の飲水量が特に増えます。黒毛和種では1日30リットル、ホルスタイン種にいたっては1日60～100リットルの水が必要になります。親牛はもちろんのこと、子牛や育成牛がいつでも新鮮な水が十分飲めるよう水槽やウォーターカップはこまめに清掃します。なお、採食量が低下した家畜は、ビタミン・ミネラル類の補給を行いましょう。

夏場はエサが腐敗しやすくなります。ロールでの給与が増えていると思いますが、サイレージ調製したロールは開封したとたん二次発酵（腐敗）が始まります。ロールはラップを開封したらできるだけ早く給与するように心がけ、その日のうちに使い切るようにしましょう。やむを得ず1日で使い切らない場合は、ビニールなどを被せ、できるだけ空気に触れないようにして下

さい。バンカーサイロからの取り出しも同様で、取り出しはできるだけ短時間でいい、取り出しが終わったらすぐにビニールを被せましょう。飼料のカビは肝機能障害など様々な症状を引き起こすため要注意です。カビが生えている部分は絶対に給与しないで下さい。

ハエに加え、サシバエやアブなどの吸血昆虫も増えます。害虫の発生場所をおさえることが重要です。ハエは堆肥舎はもちろんのこと、飼槽の食べ残しや通路にこぼれたエサからも発生します。飼槽や牛舎内の清掃が効果的です。サシバエやアブは草むらが発生源になりますので、牛舎周辺の草刈りが効果的です。また牛舎内（牛の届かない範囲）に駆除用の殺虫剤を散布することも効果的です。

(須崎 哲也)

工芸作物

◆茶

これからの作業は、来年の一番茶の母枝となる秋芽の充実と、葉層や芽数の確保を図るために大変重要です。

1 最終摘採と干害防止

秋芽の生育期間を確保するため最終摘採時期は、山間地域で7月中旬、その他の地域で8月上旬が目安です。また、遅れ芽や徒長枝は、秋芽を切らないように注意して整枝します。

高温・乾燥は秋芽の生育を抑制します。晴天が続く場合は、7日おきに25～30ミリの散水が効果的です。

2 病虫害の防除

チャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、ハマキムシ類、炭疽病、もち病、輪斑病等の病虫害が発生しやすくなります。秋芽萌芽期と二～三葉期頃の2回、殺虫剤と殺菌剤を混用して防除します。網もち病の発生が多い茶園では、四～五葉期頃にもう1回追加防除を行います。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されました。この害虫は、茶の新芽生育期に成虫となり茶園を飛び回りますので、茶園の観察に努めましょう。

3 秋肥の施用と土づくり

秋肥は、中山間地域や寒害を受けやすい品種、幼木等では8月下旬までに、

これ以外は9月上旬までに、土壌診断結果を考慮し地域の施肥基準に準じて施用します。

土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬を目安に堆肥を1～2トン施用し深耕します。長雨と日照不足で樹勢低下が見られる茶園は、液肥の散布が効果的です。

(黒木 清人)

◆しいたけ

夏場の高温は、しいたけ発生量の減少や品質の低下につながるため、高温対策を中心としたほだ木管理が必要です。伏込地の笠木の補充や遮光ネットの設置により、直射日光による高温障害を防ぐとともに、伏込地周囲の除伐や下刈を行い、風通しを良くしましょう。特に、西日が当たる場所では、笠木の張り出しを長くしましょう。

また、害菌が発生しやすい時期ですので、ほだ場をこまめに巡回し、被害が見受けられた場合は被害木を取り除いて隔離しましょう。

(永野 学)

◆たばこ

今月は、残幹処理や夏期深耕、並びに通常期販売に向けての出荷規格確認などが主な作業になります。

- 1 病害の耕種的防除のため、総かぎ終了したほ地から残幹処理を行います。その際には、すみやかに残幹根ごと、ほ地外へ持ち出しましょう。
- 2 夏期深耕は、土壌中の病原菌密度低下や、土作りのための重要な作業となります。スキ等による反転深耕を行い、10日おきにロータリー等による碎土を行うように努めましょう。特に、今年、病害が出たほ地については、念入りに行いましょう。
- 3 貯蔵害虫発生防止のため、セリコは通常期買入終了まで設置し、飛来予察に努めましょう。また、貯蔵中の吸湿防止の為、全包ポリ袋梱包を行います。
- 4 通常期販売に向けて出荷包の確認を行います。特に、異物・過水分・色損葉等の混合など、出荷規格を遵守しましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

8月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	いもち病(葉)	多	<p>中山間地域を中心に葉いもちの発生を確認しています。</p> <p>箱施薬剤を施用したほ場であっても、薬剤の効果が切れると発病することがあるので注意します。また、穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、穂ばらみ後期及び穂揃期に粉剤または液剤による防除を徹底します。</p> <p>トビイロウンカは、6月中下旬にわずかな飛来が確認されたものの主要飛来と言えるようなまとまった飛来は確認していません。しかしわずかな飛来量でもその後の増殖率が高く、坪枯れ等の被害が発生するため、ほ場での発生に注意します。</p> <p>セジロウンカは5月下旬から飛来が確認されています。</p> <p>ウンカ類の第2世代の防除適期は8月上旬になると予想されます。</p>
	紋枯病	並	
	トビイロウンカ (秋ウンカ)	並	
	セジロウンカ (夏ウンカ) コブノメイガ	やや少	
野菜類等	アブラムシ類	やや少	<p>アブラムシ類は、わずかな発生量でもウイルス病を媒介して、キュウリやピーマン等に大きな被害を及ぼすことがありますので、育苗期からの防除を徹底します。</p> <p>ハスモンヨトウのふ化直後の若齢幼虫は葉裏を集団で加害しますので、この時期の発見に努め若齢幼虫期に防除を行います。</p>
	ハスモンヨトウ等の チョウ目害虫	やや多	
カンキツ類	かいよう病	並	<p>台風による茎葉の損傷はかいよう病の発生を助長しますので、襲来前に予防散布します。</p> <p>黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、防除後の積算降水量が250mmになると次の防除が必要です。</p> <p>ミカンハダニは、今後の高温乾燥で生息密度が高まることが考えられます。高密度になると防除効果が低下しますので、発生初期段階(寄生葉率30%、1葉当たり雌成虫数0.5~1頭)での防除がポイントです。</p>
	黒点病	※※ やや多	
	ミカンハダニ チャノキアザミウマ	並 並	
茶	炭そ病	※ やや多	<p>炭そ病は秋芽の生育期に気温が高く、雨が多いと感染・まん延しやすいので、開葉期に防除を行います。</p> <p>輪斑病の発生は気温の高い二~三番茶の摘採後に多い傾向があります。二番茶摘採後に発病葉が見られたら三番茶残葉で多発する可能性が高いので必ず防除を行います。</p> <p>ハマキ類の防除適期は発蛾最盛期から7~10日後の幼虫孵化期ですので、多発園では幼虫の発生状況を確認して防除します。</p> <p>カンザワハダニは低密度での防除に努めるとともに系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。</p> <p>チャノキアザミウマはこの時期、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくく防除効果が劣るので、残効性の長い薬剤が1週間間隔での連続散布を行います。</p>
	もち病	やや少	
	輪斑病	やや多	
	チャノコクモシハマキ	並	
	チャハマキ	やや少	
	チャノソガ	並	
	カンザワハダニ	並	
チャノキアザミウマ	やや少		
チャノミドリヒメコバイ	やや少		
クシロカガラムシ	並		
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※※は注意報、※は防除情報を発表していますので、詳しくはHPをご覧ください。</p> <p>病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnpn.ne.jp/miyazakiです。</p>			